

空

平成27年4月20日発行

第13巻2号

通巻第60号

空



2015・4・5

SORA 60号

粕屋 吉田 葎

夜神楽の岩戸あつさはづれけり

半分は母に隠れて鬼やらひ

ポスターの大正美人山眠る

参道の地べたに根深重ね売る

山国の空の小さし松飾

福岡 山内 碧

夕風に震へつつ山笑ひけり

足し算も九九も湯舟で春夕焼

水温む父に似て来し肘枕

冬靄や丸太ん棒のごと汽笛

番号札貼られ城趾の桜かな

太宰府 山本 則男

西方に椿の落つる音したる

鷹の巢の月下に怒濤ありにけり

太巻の色の食み出す春隣

磯遊び王の国印出でし島

くちびるのごとくに椿落ちにけり

北海道 押田 裕見子

雪の戸の向かうに誰かゐるやうな

嫌はるるほどは愛さぬ雪女

ばあちゃんと呼ぶるるに慣れ大根煮る

文句なき塩鮭一尾ぶつた切る

凶と出し神籤どんどの火に投ず

東京 古川 夏子

干鰯焼くや若狭に紺の海
寒の水優柔不断の掌を浸す
春灯やスプーンの顔逆しまに
追儼式しばらく鳩の巡回す
南より雲開きゆく花辛夷

京都 天谷 翔子

初夢やましろき象の背に揺られ
抱き寄せし初泣きの子に初笑
人形の目の黒々と雪来るか
大いなる船の水脈より冬かもめ
侘助や老いたる母に言ひ返し

新宮 井浦 美佐子

髪切つて耳の白さよ梅日和
梅が香や嫗働くところ得て
累代の梁を守りて雛まつり
知慧多き母なつかしや雛あられ
にほどりの浮きしをしほに別れけり

東京 遠山のり子

落椿石段百段山の寺
白い雲湧きては消えて春一番
抜きん出てのつぽのビルの陽炎へり
遠浅の海の色して犬ふぐり
奥庭の池は湧き水春障子

熊本 松田 明子

除夜の鐘一打の余韻惜しみけり
先を急ぐ旅でありけり絵双六
祈るごと息整へし弓始

トロツコの坑道までの初荷かな
ふるさとと呼べる地となり注連飾

福岡 樋白 みのぶ

寺町にしづかな日暮春の雪
交番に子等のとどけし子猫かな
母の紅つけてもらひぬ雛の前
花守のごとくにいつも鳥のゐて
父のあと子も大の字に雪の上

福岡 亀井 紀子

春寒や余分なことを言ひに來し
傘寿はやさらりと過ぎて桜餅
家事一切夫に任せて春二番

白椿寡婦となりにし友とゐて
ひとり家に慣るるほかなし白木蓮

福岡 栗原 京子

雛飾る左大臣まだ箱の中
雛飾るかつて裁きの間に隣り
集落に行き止まりあり雛祭
白梅や川の水入れ武家屋敷
雛壇に合掌したる媼かな

須 惠 苑 実 耶

断食の後の朝粥別れ霜

春炬燵母座したまま眠りをり

万一のことを語り若布汁

春の昼土産の紐をていねいに

所でと話引き取る百千鳥

福岡 あさなが捷

中国西安

賓館の窓に黄砂や夜の更けし

隆盛も寵愛も夢ねむの花

しやぼん玉大雁塔を這ひ登る

春霞大地たひらに耕され

空港に青年薔薇の束抱へ

大阪 青木 朋子

早春の街あとにしてしなの号

乗客はわづか列車は雪の谷

碧空に遠き雪山神さぶる

里覆ふ雪と車内に満つ光

沈丁花身より出でたる母の声

糸島 小林 朱 夏

村中の犬に吠えられ恋の猫

土筆摘み声をかくれば招かるる

名刺に吸ひ込まれゆく花衣

一羽のみ残つてゐたる燕の巢

玄海の風を味方に鳥帰る

福岡 白水良子

春光や子の遺したる切手帳

近道の鳥居を抜けて初弥撒へ

初恋のみのりてゐたる春の夢

おぼろ夜や血判入りの恋の文

通られぬほど連翹の枝垂れけり

山梨 野畑さゆり

薄氷を踏んでみる子や富士晴るる

紅梅のまづ咲きにけり甲斐の国

春炉燧笛吹きケトル鳴りてをり

笛太鼓失せたる母の雛かな

老いてより仲良き姉妹シクラメン

東京 今井春生

生れることなき数の子やプチプチプチ

ごまめにも言ひ分あらば言ひてみよ

冬眠をとうに忘れて園の熊

風花や美容院より出でたれば

春風や耳の後ろをくすぐりし

福岡 吉村 摂護

土竜打ち土堅ければ音高し

紅梅が故山を更に遠ざくる

水温むロボット歩きの一才児

政庁は右肩上り蛇出づる

啓蟄や杖つく足をやや高く

兵庫 石川 叔子

旅に出る予定三つ四つ初暦

幼子が替へたるうそを胸に抱く

婆三人寄りて数ふる年の豆

着流しの一人混じりぬ針供養

片付けを延ばしのばしに春炬燵



空作品抄
柴田佐知子抽出

まだそこに母の居さうな春障子
いのちいつまで陽炎に立ち止まる
子落し崖海に突き立て山眠る
消滅の星のそののち風信子
竹林はそよぎ花粉の杉直立
水温むころに別れし記憶かな
杭の鶴へさざなみ通ふ余寒かな
初蝶の息ととのへてゐるところ
魚ゐる処ふくみる春の水
恥らへり告白の息白きこと
風車買ひてより子がよく走る
立ち枯れの木の呪えさうな寒の月
アネモネの疑ひ深き黒き芯

高倉 和子
中田みなみ
荒井千佐代
服部 早苗
だいじみどり
野 上 杏
深川 淑枝
戸栗 末廣
宮井 知英
田岡 千章
秋 千晴
原 友子
山田 正子



枯枝を枯色雀思ふまま

春を待つ卵の殻を土に混ぜ

夜神楽の岩戸あつさりはづれけり

冬靄や丸太ん棒のごと汽笛

くちびるのごとくに椿落ちにけり

ばあちゃんと呼ぶるるに慣れ大根煮る

春灯やスプーンの顔逆しまに

侘助や老いたる母に言ひ返し

髪切つて耳の白さよ梅日和

交番に子等のとどけし子猫かな

春寒や余分なことを言ひに来し

集落に行き止まりあり雛祭

空港に青年薔薇の束抱へ

沈丁花身より出でたる母の声

名刺に吸ひ込まれゆく花衣

春光や子の遺したる切手帳

矢野百合子

松尾龍之介

吉田 葦

山内 碧

山本則男

押田裕見子

古川夏子

天谷翔子

井浦美佐子

樋口みのぶ

亀井紀子

栗原京子

あさなが捷

青木朋子

小林朱夏

白水良子

薄氷を踏んでみる子や富士晴るる

土竜打ち土堅ければ音高し

翔び立たば凍鶴の羽砕けむか

おつかひの往きも帰りも金鳳華

包丁に峯と刃のあり海龍

菌打ちの木つ端飛びちるいぬふぐり

悪相の極まつて来し恋の猫

水底に月を沈めて雁帰る

涅槃図を下げたる紐の頼りなし

猫の子の身を裏返す膝の前

本日はお日柄もよく桜鯛

ふるさとや車窓に雪の吹きつけて

百畳の端まで飛ばすカルタ札

剪定を手伝ひに来る隣の子

木枯の一途に人を恋ふる日ぞ

御降りやつま先立ちに縁起牛

野畑さゆり

吉村 摂護

天谷 翔子

柴田志津子

田中とし江

千波 悠

永淵 恵子

ふじの 茜

松田 明子

亀井 紀子

松本 司

林 徹也

吉田 菫

苑 実耶

織田 高暢

えとう 樹里



南風や切り込み隊の骨も砂

枝先の唄ひだすかに芽吹きけり

馬小屋に養生の札日脚伸ぶ

白雲や翁ひとりの半仙戯

梅日和日がな人寄る撫仏

薄氷光まみれに流れけり

リボン赤く戦ひにゆく恋の猫

種物屋店主はいつも店の奥

眼帯の取れたる妻の梅日和

目を病みし母に梅の香手で送る

鶴帰る父はは黄泉へ行つたきり

麻酔醒め春の吐息となりにけり

絵馬堂の奥へ一筋春日差

聞こゆるは鳥の声のみ雪見舟

如月の大銀杏より鳥礫

寒燈を帰り来る子の部屋に満たす

吉村 撰 護

遠山のり子

西住三恵子

森 俊 人

石川 叔 子

田坂能雄

井上 和 子

田邊 豊 子

日 高 孝

立花 一 枝

小谷 一 夫

長末 不 断

田代 貞 枝

古川 夏 子

酒井みち子

押田裕見子



夕鶴の舞台はねたる雪の夜

土掘れば春の息吹の湧き上がる

曇るるやたわいなきことうつくしく

元日や一日だけの大家族

花菜茹で冷たき水に放ちやる

色紙で折りたる鶴も雛壇へ

また少し座布団ずらす日向ぼこ

春時雨遺品は茶箱二つのみ

福みくじ混ぜて撒きをり節分会

冬の日や潮の匂ひの残る町

意を決し出づればさほどなき寒さ

夜の桜ちりこむ箸を使ひけり

軽トラに花見の莫塵と犬乗せて

杖ついて見上ぐるばかり花の山

上川いつ子

清水量子

乾有杏

横田敬子

山口弘子

井上義郎

後藤園子

荻悠子

三輪敏夫

植田洋子

今井春生

川崎よしみ

犬丸勝子

森真二

空作品評

柴田佐知子

しい。作者の柔らかな眼差しが感じられる作品。

恥らへり告白の息白きこと

田岡 千章

沈丁花身より出でたる母の声

青木 朋子

寒が締まった空気の中で吐く息が白く見える。自分が生身の人間であることが、否応なしに実感させられる。話すと殊に白息は豊かに我が身より溢れ出し、恥ずかしさを覚える。まして「告白」であれば…。作者の若々しさがいい。

母の声に似てきたという内容の句は多い。つまり類句が多いのである。しかしこの句は「身より出でたる母の声」という思い切った断定によつて、にわかには鮮な変貌を遂げた。

冬靄や丸太ん棒のごと汽笛

山内 碧

包丁に峯と刃のあり海隴

田中とし江

船の汽笛であろう。ボーと低く響いてくる汽笛の音をどのように説明したらいいだろうかと考えてみたが難しい。「丸太ん棒のごと」は比喩として秀抜だ。冬靄と丸太ん棒が見事に響き合っている。

ごく当たり前のことを言っているだけである。あらためて「峯と刃」と表記されると、ただの包丁が鍛え抜かれた日本刀のように感じられてくる。「海隴」が句に更なる味わいと深みを与えている。

交番に子等のとどけし子猫かな

樋口みのぶ

集落に行き止まりあり雛祭

栗原 京子

捨てられた子猫であろう。取り囲んだ子供たちが相談した結果、子猫を持ち込んだのは交番。その時の子猫と子供たち、そして警察官の表情を想像するのも楽

後ろに山を控えた集落であろう。径は細くなりそのうち湿った崖や藪で行き止まり。田舎の叔母の集落がこの通りであった。鄙びた地に伝わってきた雛たちも居るのである。上五中七と季語の取り合わせが効果的で、その地や村人の佇まいも見えて来る。「以下略」

空集

柴田佐知子選

囀や車より母抱きおろし

おつかひの往きも帰りも金鳳華

福岡

柴田志津子

遊び場は赤い椿の薬師さま

朝の陽の斜めに來たるヒヤシンス

古井戸も庭の一景地虫出づ

いつも來る二羽の小鳥やわらび餅

病床の鏡に入るる夕ざくら

包丁に峯と刃のあり海朧

岡垣

田中とし江

野遊びの果てを巨船の過ぎゆけり

東京のホームは長し大試験

寒鯉のパン二切に滾りけり

立ち上がる潮目を飛んで漁始

玄室の古鏡に映る春の闇

豚の貌立てて供へぬ春節会

長崎

千波 悠

菌打ちの木つ端飛びちるいぬふぐり

鶴歸る時の空を旋回し

急湍に落ちて椿の向きかはる

春一番大きく開く旅靴

福岡

矢野百合子

喜寿となる我に雛のほうと笑む

お雛さま留守番ばかりさせられて

もう急ぐことなき日日やしじみ汁

蕊見せて寺を染めぬる落椿

いくつもの橋くぐり來る春の潮

翔び立たば凍鶴の羽砕けむか

京都

天谷翔子

枯菊を束ねし紐の濡れてをり

子の声の空にひびける雪解みち

黒板に書き足すメニュー春の雪

川越えて來し逆光の遍路杖